

# 研究調査への アドバイス

## 研究生生活の周辺

孫野長治\*

### はじめに

7, 8年前の学園紛争の頃のある日、活動家の学生グループに会見を申し込まれて単身会場にのぞんだところ、「先生の大学教育に対する理念をお伺いしたい」ということであった。私が、「学生教育に対してそれなりの考えは持っているが、言葉ですらすらと述べるような形では持ち合わせていない」と答えたら、「そんなことでよく大学教授の仕事がつとまるものだ」となじられたことがある。

これと同じように、「研究・調査のかんどころは？」と問われてもうまく答えられない。その代わりに、自分の研究の周辺のことがらを記し、そこから研究のしかたについて何かを感じとって頂ければ無上の幸いである。

### もとごえ

40年ほど前、私が陸軍に入営した時、中谷先生が母に「物理学が何であるかよく判らないうちに研究を中断してしまうのは惜しい」ともらされたそうである。幸いに私は、無事復員して先生のもとでまた物理学の研究を続けることができた。しかし、研究はしても物理学の何たるかを真に理解し得たかどうかは疑問である。ただ、雲物理学という物理学と気象学の中間分野を専攻することになったので、ある場合には両者から拒否され、ある場合には後者に受け入れられて、それなりに物理学と気象学の差のみこめたつもりである。

中谷先生のかねがね申されたことに、「研究には<sup>もとごえ</sup>基肥が大切である」がある。ここで、基肥とは専門の本を読むことであり、論文雑誌は速効性の肥料に相当する。当

座の論文を書くためには耳学問や最近の論文の知識でこと足りるかも知れない。しかし、それだけではすぐ息がきれてしまう。実のある研究を続けて発展させてゆくうえでものを言うのは、若い時に、まだ具体的な目標の定まらないうちに身につけた実力と知識の集積である。

具体的に研究に取り組んでからは、数学や英語の勉強をしているゆとりはないのが普通である。最新の論文に目をおすのが精一杯ということになろう。年をとると論文を読む時間も気力も衰えてくる。速効肥料もきかなくなれば、もう研究の止めどきであろう。

### 研究環境

研究室におれば、年に論文の一つや二つを書くのが常態であって特別な感懐があるわけではない。しかし、研究生生活を一たび中断したならば二度とできなくなるであろうことは推測できる。そういう意味で、研究しているのが普通といった環境を喜ばなくてはなるまいし、研究室の雰囲気こそそういう状態に保つ義務のようなものを意識する。

自然科学の成果は国やイデオロギーの差を超えて万人に理解さるべき筈のものである。したがって、いかなる国で挙げられた成果でも、次の研究者はそれを踏台としてさらに高度の研究へと進んでゆくであろう。先人と同じ研究結果を得たのでは、勉強としての意味はあっても研究としては全く無意味なことである。後者のための踏台として、また重複による無駄を避ける意味からも、研究者はその成果をしかるべき雑誌に発表して後継者の利用しやすい形で残しておく義務があろう。発表に意をくばるのは決して売名行為ではなくて、研究者の当然の心得なのである。

\* C. Magono, 北海道大学理学部。